カリマンタン首狩と国家：民族対立抗争の政治人類学

石　井　眞　夫

要旨: スハルト政権崩壊後の混乱が続くインドネシアでは、いわゆる民族抗争が各地で続発している。ボルネオ南部、インドネシア領中部カリマンタン州サンピトの町を中心に起きた首狩事件も、こうした民族抗争の一つとして、インドネシア国家政治や「民族性」の問題として一般化され理解されることが多い。しかしながら、こうした一面的理解は地域固有の民族誌や首狩文化の意義を看過し、ボルネオの地域性にもとづく事件の本質を見逃すことになるだろう。こうした視点から事件を見ると、汎東南アジア的な平地民と山地民の対立、伝統国家と権力のあり方とそれをめぐる諸観念、アジア的農耕文化と首狩文化など地域固有の文化が事件と深く関わっていることが分かる。そして、首狩は過去の蛮行、文化遺産ではなく、今日もボルネオ文化の内奥に、人々の心の内に、現実として生き続けている。本稿は民族誌という視点から、首狩事件の人類学的分析の試みであると共に、首狩事件を通じて民族誌が記述するボルネオ文化をより深く理解しようとする試みである。

【カリマンタン首狩事件】

2001年2月18日、インドネシア領ボルネオの中部カリマンタン州で発生した「民族暴動」は、土着ダヤク系住民による残虐な首狩慣行の突然の復活として、近隣の東南アジアはもちろんのこと全世界を震撼させた。森内閣末期の政治的混乱と愛媛丸事件の渦中にあった日本ではほとんど関心を惹かなかったが、タイム誌3月12日号（Time Vol. 157, No. 10）は多くの写真と共にこの「野蛮で残虐な」事件を特集した。首狩の犠牲となったのは、太平洋戦争後インドネシア共和国成立とともに始まった大規模な移民政策のもと、カリマンタンに移住したマドゥラ人達で、事件が収束する5月上旬までの間に少なくとも500人が殺害され、おびただしい生首が狩られただけでなく、ダヤクは犠牲者の血を啜り肉を食べたと伝えられた。山刀、槍、吹矢などの武器で武装したダヤク系民兵達は刈り取ったマドゥラ人の生首を勝利の証として槍の穂先に串刺しにして近隣をパレードし路傍に展示したという。

Ⅰ．はじめに

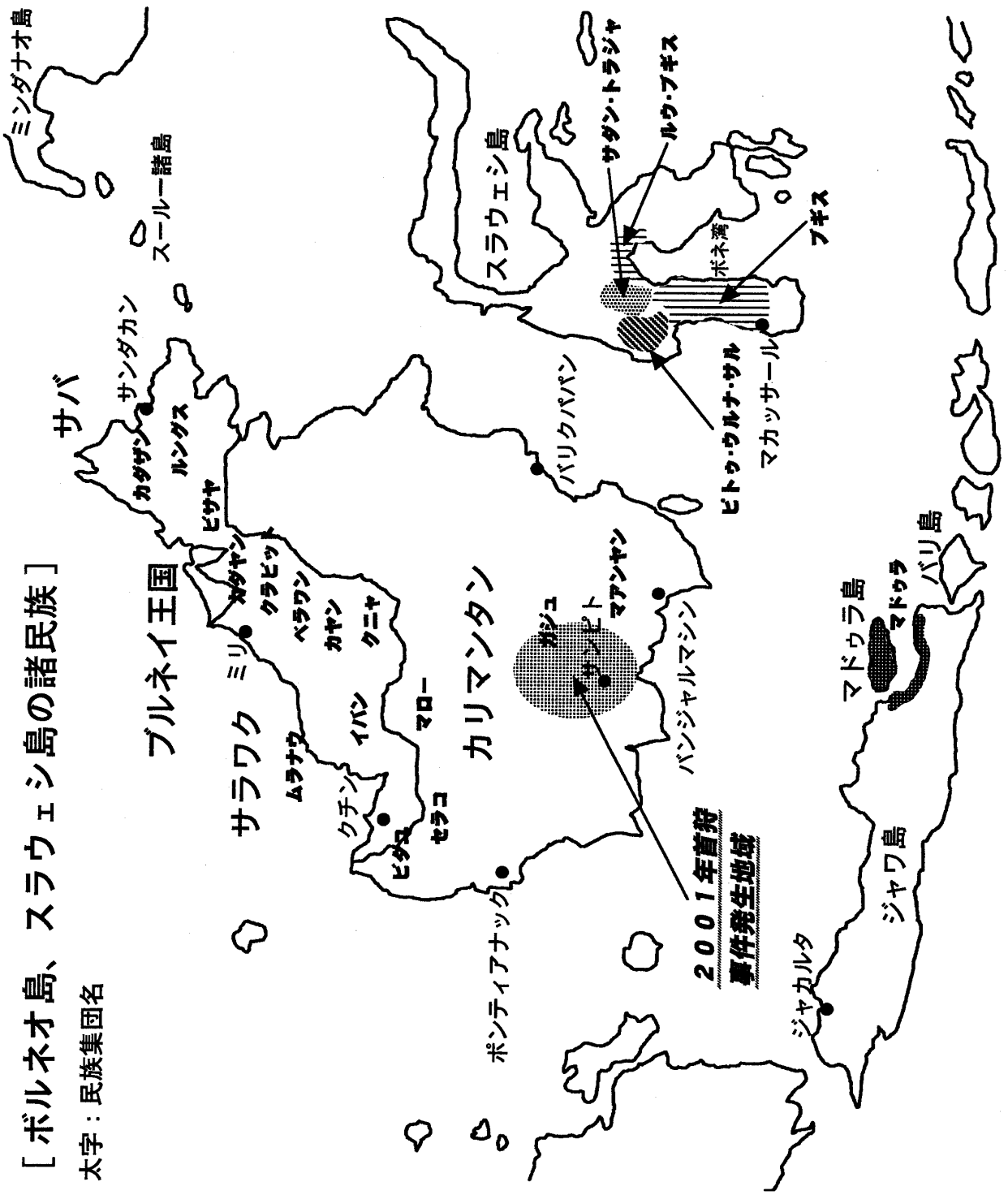
インドネシアではスハルト政権末期以降各地で民族集団の対立抗争が激化している。昨年分離独立を果たした東チモール州だけでなく、インドネシアの両端、西端のアチェ特別州と東端のパプア州（旧称イリアン・ジャヤ州）では分離独立をめぐる抗争が激化しており、またマルク州と中部スラウェシ州ではムスリムとキリスト教徒の対立が絡む暴動が続いている。首都ジャカルタを含むジャワ各地でもムスリムとキリスト教の宗教対立に起因するといわれるテロ事件や暴動が頻発している。そうした中で、カリマンタンの「民族暴動」もこの2月から5月の事件が最初ではない。1997年には南カリマンタン州バンジャルマシンで、また1999年には西カリマンタン州サンバスでの大規模な暴動が報じられている。この時も今回同様多くのマドゥラ

人達が避難を余儀なくされた。

頻発する「民族暴動」については、第2代大統領スハルト軍政時代が残した負の遺産に起因するという見解が支配的である。強大な陸軍力を背景に国家統合と経済開発を進めたスハルト政権は、インドネシアの国民統合と経済発展において相当な成果を収めたとはいえ、同時に華人資本との結びつきを強めることによって汚職と腐敗を蔓延させた。その結果として、貧富の格差が拡大し、特に都市の貧困層が形成された。貧困層の多くはムスリムであり、スハルト時代末期のアジア経済危機が引き起こした経済的、政治的混乱はこれらの人々に大きな打撃となった。やり場のない不満は都市富裕層や商店経営者達、特に華人達に向けられることが多い。華人達は経済力によって政権の中枢と繋がり、賄賂政治を蔓延させ利権をむさぼっていると見られているからである。華人達は固有の祖霊信仰を残しつつも、大多数はキリスト教徒で、このことがインドネシアにおけるムスリムとの宗教対立の背景になっている。民族暴動はこれら経済的、文化的背景が構造的要因となって引き起こされているというのが一般的な見方であり、また各々の事件には政治的目的から陰の煽動者の存在がたびたび指摘されてきている。こうした分析は事件の一面を正しく指摘したものだと思われるが、カリマンタンの事件はこうした諸事件とはいささか様相を異にしているように見える。

カリマンタン事件で暴動の主役となる、いわゆる「ダヤク」系住民はボルネオ島内陸山地に住む焼畑耕作民であり、伝統的信仰を保ちつつもその多くは、少なくとも名目上キリスト教徒である。経済的に豊かであるとは言えないが、古くからの森林生活は安定したものであり、近年ではその伝統文化がボルネオ観光の焦点となっている。少なくともボルネオではダヤクは社会の底辺の貧困層ではない。一方、首狩の犠牲になったマドゥラ人は熱心なイスラム教信者として知られている。故郷のマドゥラ島はジャワ島の東北部スラバヤ市の沖合にあるが、島は乾いて痩せた大地に覆われ決して豊かな土地ではない。移住先のボルネオ島では水田開発や森林開発に携わるが、多くは森林伐採の下層労働者、小商店の経営、ベチャ引きなどで生計を立てており、少なくとも富裕層ではない。インドネシア各地で暴動に訴えるのは主として社会の中枢から周縁化された貧困なムスリム層であることを考えると大きな相違が感じられるだろう。

カリマンタン事件の政治的背景として指摘されているのは、スハルト政権崩壊後のインドネシア国軍の弱体化と地方自治権の拡大、中央集権政治の衰退である。森林伐採などにより伝統的な居住圏をせばめられてきたダヤクのインドネシア政治に対する不満が一挙に爆発しうる素地が出来上がり、マドゥラ人はその捌け口になったという見方である。しかし、移民はマドゥラ人に限られるわけではなく、しばしば民族暴動の捌け口とされる中国系をはじめ、マレー人、ジャワ人、バリ人など多くの人々がいる。その中でマドゥラ人のみが首狩の標的になったのは、マドゥラ人は気性が荒く、排他的で強引、剛毅な気風をもつ人々として知られ、そうした画一化されたイメージがマドゥラ人をスケープゴートにしたというのが一般的解釈である。さらに、事件は「首狩」という、ダヤク文化を象徴する衝撃的な慣行とともに語られている。首狩という蛮行から連想されるものはダヤクとその伝統文化であり、ダヤクの「民族性」である。この事件が「民族暴動」として語られ、マドゥラ人とダヤクとの「民族対立」であるとされるのは、首狩という不合理な残虐行為を、合理的に説明し理解したいと願う理性によるのかも知れない。あるいは、ダヤクとマドゥラ人の民族性の違いを指摘することによって、各地で頻発する暴動と社会的混乱を「民族問題」という理解項目で概括し、それらの背景に共通基盤を見いだそうとしているのかも知れない。確かに諸分析が示すように、この事件はインドネシア国政の混乱


[ボルネオ島、スラウェシ島の諸民族]
太字：民族集団名
ミンダナオ島
スール一諸島
サバ
サンダカン
カダザン
ルンダス
ビサヤ
ブルネイ王国
カダヤン
クラビット
ベラワン
カヤン
クニャ
ミリ
サラワク
ムラナウ
イバン
マロー
クチン
ビダユ
セラコ
カリマンタン
ポンティアナック
ガジュ
サンピット
マアンヤン
バンジャルマシン
2001年首狩
事件発生地域
バリクパパン
スラウェシ島
サダン・トラジャ
ルウ・ブギス
ボネ湾
ブギス
ビトゥ・ウルナ・サル
マカッサール
マドゥラ島
マドゥラ
バリ島
ジャワ島
ジャカルタ

という背景なしには起こり得なかっただろう。しかし、それは抗争が現実のものとなる条件ではあっても、それを生み出した要因ではない。一般的な分析からはカリマンタン事件の特性、あるいは事件を生み出した背景としてのボルネオ文化の綾を見いだすことは出来ない。事件はインドネシア国家政治の脈絡とカリマンタン固有の民族誌的状況の中で起きたものである。

Ⅱ．インドネシア政治とボルネオ

現在のボルネオ島の国境線は植民地主義の名残を強く残したものである。島名が示すように、植民地時代以前のボルネオはブルネイがもっとも強大な権力を誇っていた。植民地時代に入ると、それはオランダ領ボルネオ（現インドネシア領カリマンタン諸州）、北ボルネオ会社が経営する英領サバ（現マレーシア領サバ州）、ブルック王朝が支配するサラワク（現マレーシア領サラワク州）、そして弱小化した小国ブルネイ王国へと分割され、この境界線は今日のインドネシア、マレーシア、ブルネイの3国へ引き継がれた。島の東北部は現フィリピン領スール諸島からミンダナオ島南部との文化的な類似性が強くなり、また島の南部はスラウェシとのつながりが見られるなど、若干の文化的相違が指摘できるとはいえ、ボルネオ原住民はすべてオーストロネシア語族に属するヘスペロネシア諸語を話し、その文化は相違よりも共通性が強い。ボルネオ島が三つの国家に分割支配されるに至ったのは植民地主義の遺産でしかない。ボルネオの国家帰属がまだ流動的だったスカルノ時代のインドネシアは、こうした文化的共通性と歴史的背景の中、マレーシア連邦構想に対抗して現在の東マレーシア（サバ、サラワク）をインドネシアに併合しようと企てた。1960年代前半のコンフロンタシ政策である。しかしながら、スハルト時代以降の国家政治の相違は三地域の今日の姿に大きな隔たりをもたらした。特に島北部のサバ、サラワク、ブルネイ側と南部のインドネシア領カリマンタン側との間の相違は顕著であり、それは両地域を統治する国家の政策の相違に由来する。今回のカリマンタン首狩事件はそうした政治の違いが重要な背景になっている。

カリマンタンと命名され[1]、中部、東部、西部、南部の各州に分割されたインドネシア領ボルネオは、オランダ時代には植民地辺境で、特に南部は海岸部にいくつかのマレー人小土侯が交易を中継する以外は、ダヤクと呼ばれる山地民の世界であり、奥深い熱帯雨林と湿地帯に覆われた島に対するオランダ植民者達の関心は低かった。カリマンタンに本格的開発が及ぶのは、特に1970年代に入ってから盛んになるトランスミグラシ計画の結果である。この政策はすでにスカルノ時代にさかのぼるが、開発経済政策を柱とするスハルト時代に入り特に顕著になったものである。

トランスミグラシ計画にはいくつかの狙いがあるが、それは次のようにまとめられるだろう。まず、インドネシア国内の人口分布の均等化である。インドネシア共和国成立後半世紀を経た今日でも、地域による人口偏在は著しい。ジャワ島、バリ島、スラウェシ南部などは特に人口周密で耕地が足りず、食糧不足と貧困をもたらしている[2]。第二に開発で、インドネシア国内で開発が遅れているとされる地域には、ボルネオ、イリアン、スマトラ南部の湿地帯、中部スラウェシ、小スンダ列島などがあげられる。中でも、ボルネオ、イリアンなどは原生林に覆われ、野蛮、未開な原住民、「オラン・フータン」[3]が住む世界とされ、それだけに豊かな天然資源に恵まれたこれらの地域の開発はインドネシアにとって急務であった。第三にそうした国内移民政策を通じての新興インドネシア共和国の国家統合である。15の自治国、自治領から

なる「インドネシア連邦共和国」として出発し、インドネシア共和国へと統一されて以来、文化慣習ばかりか人種形質上も異なる特徴を持つ多数の民族集団を「インドネシア」という共通の統合意識を持った想像の共同体、国民国家へ統合してゆくためには、広大な国土の隅々まで、とりわけ未開発地域へ国家秩序を浸透させる必要があった[4]。インドネシアの中枢を占めるジャワ人などの国内移民は、そうした秩序の末端を担うと同時に、中央の支配が及びにくい「未開発地」に新たな時代と秩序の到来を印付ける象徴としての機能も期待された。

インドネシア化への地域の反発はカリマンタンのみならず、インドネシア全土に見られるもので、それは共和国成立期のスカルノ時代に始まると言って良い。インドネシア共和国として統一された後も、ダルル・イスラム、南マルク共和国、北スラウェシなど反インドネシア化の動きが続いた。「インドネシア」とはオランダ植民地であり、ジャワ人はオランダに代わろうとしているという自由アチェ運動の主張はその代表的なものである。しかし、1960年代半ば以降のスハルト時代に入るとこうした分離運動は軍事力によって押さえられ、1968年にはイリアン・ジャヤ（現イリアン州）が26番目の州として、そして1976年には東チモールが27番目の州としてインドネシア共和国に併合される。

スハルト時代の統一と安定への方向は、軍出身のスハルトがインドネシア国軍を背景に強権的支配体制を敷いたことによるが、それによってもたらされた政治的安定がインドネシア経済の飛躍的発展もたらしたしたことにもよっている。また、スカルノ時代と対照的な親米反共という政治的立場は、当時の国際情勢の中でアメリカ、日本、オーストラリアなどから積極的に経済援助を引き出したという点でインドネシアの経済成長に有利に働いた。スハルト軍政時代にはこうした経済発展の成果と強権政治の陰に隠れ、表面化しなかった反インドネシア的な動きが顕在化するのは、スハルト政権のほころびが目立ちはじめる1990年代の半ば、スハルトが大統領6選を果たした頃になってからである。この時期には、断絶状態にあったインドネシアと中国との国交が正常化し、それまで無視され続けてきた東チモール問題を国際社会が大きく取り上げはじめる時期でもあった。また、世界各地で「民族紛争」が多発しはじめる時期でもあり、インドネシアの「民族対立」をこうした情勢の中に位置づけることは可能である。1990年代以降の反インドネシア的な動きは、国際社会の強い支持を背景に独立を遂げた東チモールをはじめ、今なお武力衝突が伝えられるアチェ、イリアン、マルク、中部スラウェシなど多くを挙げることが出来るが、カリマンタンで「民族抗争」の発生が伝えられるようになるのもこの頃からである。

これらの紛争、対立事件の発生地域は、トランスミグラシ政策が最も積極的に進められたスマトラ、カリマンタン、ヌサ・トゥンガラ、イリアンなどに多くが集中している。このことは、トランスミグラシ政策が単なる開発政策ではなくインドネシア化の一環として進められ、その象徴と考えられていることと関連している。こうして見てくると、これらの動きは長年のインドネシア化政策、あるいはジャワ人による新植民地主義に対する反発が、中央政府の支配力の弱体化と共に噴出したものだと見ることは出来るだろう。そして、カリマンタンはトランスミグラシによる国内移民が最も多い地域である[5]。

カリマンタン事件とインドネシア政治との不可分な関係はこうした政策的なものばかりでなく、最近のジャカルタ政界の権力関係とも関連していると言われている。スハルト時代の終焉と共にインドネシア政治で凋落著しい軍部が復権を狙い、国内、特に辺境地域で争乱を引き起こし、その存在の重要性を印象づけようとしたという解釈である。また、事件の直接の煽動者

にカリマンタン駐在軍の不満などが噂され、同様にマルク事件の陰に国軍関係者の煽動があったとする背景分析も、最近のインドネシア政治との関連から事件の理解しようとするものである。こうした噂や背景分析がどこまで妥当なものかについての判断は難しいが、頻発する事件がインドネシア国家の成立とその後の政策、ジャカルタ政界のさまざまな出来事と密接な関係にあることは確かだろう。

カリマンタンはインドネシア領ボルネオの呼び名であり、共通の文化的特徴を多く持つボルネオ北部、サバとサラワクはマレーシア領に属することはすでに述べた。今日のサバ、サラワクも人口移動の活発なところである[6]。カリマンタン同様、山地にはダヤクと呼ばれる山地民が焼畑耕作を営み、海岸部平野、特に都市周辺には多くのマレー人が居住しており、両者は文化的に対立する存在として認識されている。しかしながら、平地部に住むマレー人とダヤクがカリマンタンのような「民族」対立抗争事件を引き起こしたことはない。また、同じくダヤクと呼ばれながらも、サバ、サラワクのダヤクは、今日の東マレーシア民族誌ではさまざまな「民族」名、または「部族」名で個別に認識され、ダヤクという名称が特定の民族集団を表すことはない。共通の文化的特徴を持っていた、カリマンタンとサバ、サラワクに対照的な民族誌的状況をもたらしたものは、植民地時代に始まり、インドネシア、マレーシアという独立国家成立後に引き継がれた国家政治の相違にもとづくものと見るべきであろう。

すでに述べたように、オランダは中心地ジャワの植民地経営には熱心であっても、辺境のカリマンタンの経営に積極的に取り組むことはなかった。ボルネオの植民地経営に最も熱心だったのはサラワクの支配者ブルック王朝で、19世紀半ばからの約百年間に支配地を拡大すると共に、くまなく植民地支配と開発の手を伸ばした。そうした中で、かつて海ダヤク（Sea Dayak）と呼ばれた人々は、ブルック王朝との協力関係の中でイバン（Iban）族と称する民族集団として認知され、自称するようになる。また、陸ダヤク（Land Dayak）はビダユ（Bidayu）族と称されるように、かつてダヤクと総称されてきた山地民は、カヤン（Kayan）、クニャ（Kenyah）、クラビット（Kelabit）などさまざまな「民族」、「部族」名称で区別されるようになった。英北ボルネオ会社が支配し、森林開発を主に手がけたサバは、フィリピン南部の諸族との繋がりが強いが、ここでも山地民はドゥスン（Dusun）、ルングス（Rungus）、ムルット（Murut）など多くの民族名称で個別に認知されるようになっている。そして、サバ州政府はマレーシア成立以来常に自立的で、カダザン（Kadazan）と呼ばれる人々が中心となっているが、今日なおマレーシア中央政府との対立関係が続いている。

マレーシア領側のこうした状況に対して、インドネシア領カリマンタン諸州では、時にマアンヤン（Ma'anyan）、ガジュ（Ngaju）、など植民地時代のオランダ研究者が用いた名称が使われることがあっても、山地民は総じてダヤクと呼ばれ続けてている。東南アジア島嶼部諸民族の概説書としてしばしば引用されるル・バー編集の『島嶼部東南アジアの民族集団』（Le Barr, 1972）でも、サバ、サラワクに関してはいくつもの「民族集団」を概説しているが、遥かに広い面積を占めるカリマンタンに関しては、「カリマンタン・ダヤク」として上記のマアンヤンとガジュを概説しているに過ぎない。

このように見ると、それぞれの地域固有の事情はあるにしても、サバとサラワクは植民地時代以前から遠隔地権力の支配に服することなく、比較的自立的なシステムの中に生きて今日に至ったと見ることが出来る。これに対して、カリマンタンはジャワを中心とするインドネシア共和国成立以来、その辺境として開発と支配の対象とされてきた。ジャカルタ政府にとって、

カリマンタン山地民とは馴化され、同化されるべき対象で、野蛮未開の「森の人々」、オランウータンであり、ダヤクという名称はこのことを表している。

確かにカリマンタン事件は反インドネシア政治という点で、また民族集団間の対立という点で、アチェやイリアンなどの出来事と共通する面を持っている。しかし、カリマンタン事件はアチェやイリアン、東チモールと異なりインドネシア政府に対する反旗でも、インドネシア国家からの離脱を目的としたものでもない。したがってアチェやイリアンのように統一的なリーダーシップが存在するわけではなく組織的な反政府運動ではない。また、マルク事件のようなムスリムとキリスト教徒の宗教対立に発するものでもない。マドゥラ人はムスリムで、カリマンタン・ダヤクはキリスト教徒が多数を占めるのは事実だが、それが事件の要因として語られることはない。そこにはカリマンタン、と言うよりボルネオに固有の民族誌的な要因が見られる。次に、そのボルネオ民族誌から事件の背景を探ってみよう。

Ⅲ．伝統政治の舞台：山地民と平地民

カリマンタンに限らず、ボルネオでは山地民ダヤクと平地民ムラユ（マレー人）は対立的な民族概念として古くから人々に意識されている。また、山地民と平地民の概念的な対立はボルネオ民族誌に限られたものではなく、大陸部、島嶼部を通じて東南アジア地域に広くみられるものである。

リーチはビルマ高地の政治組織に関する古典的研究の中で、山地民カチン族と平地民シャン族の共棲関係について記述し、カチンの政治体系はシャンのそれを模したグムサ型とその対極にあるグムラオ型という二つの理念的政治体系を両極として揺れ動いているという動態的分析を示した（Leach 1954）。平地民シャンは集権的首長制と首長、貴族、平民、奴隷よりなる階層制を政体とし、仏教徒であり、水稲耕作に従事するのに対して、山地民カチンは祖霊など精霊を信仰する非仏教徒で、焼畑耕作に従事する。その政体は、シャンの影響下に大規模な集落を集権的、階層的に組織する「専制型」のグムサ型政体と、小規模村落に組織され平等な「民主型」のグムラオ型政体に分けられる。シャンはカチンを野蛮未開な山地民として軽蔑しつつ、勇猛な首狩戦士である山地民を首長国の主戦力として利用し依存している。シャンはカチンを支配下においていると考えているが、カチンはシャンの財力と支配権を利用しているに過ぎないと考え、侮蔑の対象である平地民に服属しているという意識はない。シャンに接近しようとするカチンはグムサ型の政体を組織し、山地の奥深く遠ざかろうとするカチンはグムラオ型の政体を組織する。さらにリーチは、山地民の政治組織が平地民との対立的な関係の中で、二つのタイプの理念的政体に組織されるのは高地ビルマのカチンに限られたものではなく、東南アジア大陸部に広くみられるものであるとし、この二つのタイプはインド型支配と中国型支配という王権支配の二つのタイプとも対応すると指摘する（Leach 1961）。

リーチが指摘する平地民と山地民との理念的な対立は、東南アジア文化の軸をなす主作物である稲作の二つのタイプ、水稲耕作と陸稲耕作の対照に対応する。

- 水稲耕作：灌漑恒久水田、労働集約的、大規模集村、定着村、支配／被支配と階層制
- 陸稲耕作：焼畑移動耕作、粗放的、小規模散村、移動性、自由と平等

また、これにともない社会組織のあり方も対照的なものである。

┌ 水稲耕作型社会：集権制（王制、首長制）、仏教など大宗教、交易のネットワーク、いわゆる大民族
└ 陸稲耕作型社会：小規模権力への分散、祖先崇拝と精霊信仰、親族関係のネットワーク、少数民族

かつては焼畑による陸稲耕作は、未だ水稲耕作を知らない山地民の後進的農耕技術であるとする短絡的な解釈がされたが、山地民は水稲耕作とその技術を知らないわけではない。この対照は農耕技術や生態適応の問題ばかりではなく、民族のアイデンティティーなど社会的要因に基づく場合が多い（Helliwell 1992）[7]。

同様な山地民と平地民との対立はボルネオに隣接するスラウェシにもみられる。南スラウェシ観光で著名なトラジャ族は、ル・バー（Le Barr op. cit.）の分類によると20ばかりあるスラウェシの言語・民族集団の一つで、スラウェシ南部マカッサール海峡に注ぐサダン川上流に住む人々をさす。しかし、彼らがトラジャ族としての民族意識を共有した集団として植民地時代以前から存在していたかどうかは疑わしい。トラジャという名称は、元来「山（上）の人々」あるいは「西の人々」という意味で、南スラウェシのボネ湾北部に住むブギス人すなわちルウ人（To Luwu「海の人々」）が西方の山地の住民を指して用いた名称である（山下 1988：13－18）。ブギス人はボネ王朝に代表されるように、王制と階層制に組織され、ムスリムであり水稲耕作を営む交易民族として知られ、大きな人口を抱える民族集団である。元来、トラジャという名称は南スラウェシの今日言うトラジャ族ばかりでなく、中部スラウェシ山地で焼畑耕作を営む非ムスリムで首狩慣行を持っていた山地民を指していたもので、今日のような「トラジャ族」が形成され、民族集団としての自覚を持つに至ったのはインドネシア共和国成立後のことである。かつてのトラジャ族は水稲耕作を営み王国を形成したイスラム教徒ブギス、マカッサールなどの平地民と不可分の関係にあり、平地民社会を模した「専制型」政体と自由な山地民の「民主型」政体がある点、リーチが描くカチン族ときわめて近似した状況にあったと推定される（山下 op. cit.：20－21）。

今日のトラジャ族の西側に居住する人々はピトゥ・ウルナ・サル（Pitu Ulunna Salu、7つの川の上流、源流の人々）と呼ばれ[8]、また自称する山地民だが、民族集団としてのまとまりがあるわけではない。彼らの民族帰属意識は今日でもきわめて曖昧で、時にインドネシア人、時にトラジャ族、時には村の所在地からマンビ人など状況に応じてさまざまに自称する。彼らはイスラムとキリスト教が伝わる以前には、そしてかなりの人々は今日もなお「アダ・マップロンド（ada' mappurondo）」と呼ばれる祖霊信仰にもとづく慣習的儀礼体系に従っている。その根幹をなすのはパグガエ（pangngae）と称する首狩祭祀で、首狩を行わない今日では生首を用いることなく、ココナツなどで代用することによって儀礼を継続している。この人々は、海岸部に住むイスラム教徒で、海上交易に長けたマンダール（Mandar）の人々と対立しつつ共棲関係にあった。マンダールは山地民を労働力として利用し、徴発するだけでなく、時に奴隷交易用に売買することもあった。これに対して、川の上流の人々はマンダール人を首狩の対象とすることで対抗した。また、マンダールは樹脂、香木、ラタンなど山地で産する交易物資を必要とし、上流の人々は海産物や海岸部の産物、鼈甲、干し魚、コプラ、カポック、サゴ、皮革、絹など、特に婚資として必要不可欠な品々を海岸部の人々に依存していた。

この上流の人々、あるいは山地民は、山地を神聖で清浄な空間に連なる地で、下流部を山地から海岸、やがて死の世界に繋がるものとして認識し、清らかな水が下流に流れ濁るように、下流の世界を劣ったものとして見ている。下流へ交易や首狩に行くことを「レバレボ（Le'ba le'bo、海へ行く）」と言い、今日ではマンダールでの出稼ぎ仕事などを表している。しかし、首狩が現実には行われなくなった今日でも、首狩儀礼パグガエは遥か昔と変わらずに続けられていると老人達は主張している。パグガエ儀礼が維持されている理由は、それが喪明けの儀礼であり、女性の手による家庭儀礼の季節の始まりを告げ、さらに若者（戦士達）の政治的成熟を公認する儀礼、一言で言えば村の豊饒儀礼だからである。彼らは、首狩はマンダールによる奴隷交易の誘拐や暴虐行為に対するもので、首狩の実行は儀礼の最重要課題ではないのだと言う（George 1991）。

こうした山地民と平地民と対立と共棲関係はボルネオでも共通している。ボルネオでは、カリマンタンでもサバ、サラワクでも、山地民はダヤクと総称されるのに対して平地民はムラユ（マレー人）と呼ばれる。ダヤクもムラユもきわめて広義の包括概念で、それぞれの起源や出自はさまざまで（King 1994: 2－3）、集団というよりも概念的な対立である。マレー人はまた、海の人々（laut）とも呼ばれ、首長制に組織され、イスラムを信仰し、平野部に住み、水稲耕作と漁撈、交易に従事する生活様式を意味する。そして、イスラムに改宗してそうした生活に同化することを「マソ・ムラユ（masok melayu、マレー世界に入る）」と言う。すなわち、生活様式を変えることによって、ダヤクにもムラユにも帰属を変更しうる自由があると言える。

この両者の関係は相互に依存しつつ対立する関係である。ムラユは交易のために山地や森林の産物を山地民ダヤクに依存する。それは、ラタン、犀鳥、香木、樹脂、香ばしい陸稲など高価なものが多い。一方山地民も、海産物をはじめ武器、青銅製品などをマレー人に依存しており、何より婚資や相続財として必要な中国製磁器の大型壺（プサカ）などを海上交易を通じた海外からの輸入に頼っている。また、マレー人権力者は獰猛勇敢な首狩民であるダヤクを権力行使の武力として利用せねばならない。

サンディンによると、ブルネイ王国の支配の周縁にあった、現サラワク領のサリバス川下流のマレー人首長はブルネイ王国の権力の末端としてサルタンが任命していた。その目的は山地民イバンを含めた住民からの米による「年税（pupu tahun）」と呼ばれる戸別税の徴収である。マレー人は山地民イバンがサリバスに移り住むようになる数世代前にインドネシア、スマトラのミナンカバウから来たと伝承される。下流域に定着村をつくるマレー人達は税を支払うしかないが、イバンはそうとは限らない。マレー人首長達は少しでも余計に税を徴収しサルタンには少ししか払わずに私腹を肥やそうとする。これに対して、サルタンは権威しか持ず、行使しうる武力を持たないので何も出来ないが、イバンは武力を行使する。彼らはしばしばマレー人首長達が税を誤魔化すと怒り、時にマレー人の村を略奪する。こうした状況の中でマレー人首長達はイバンの首長に称号を与え手なづけようとしていた（Sandin 1967: 61）。

また、ブルック王朝がイギリス本国からの武力支援無しにサラワクの平定と支配に成功した裏には、第二代ラジャ（王）のチャールズ・ブルックが巧みにダヤクを懐柔し、武力として活用出来た事情があるという（Pringle 1970）。同時に海ダヤク（Sea Dayak）とブルック王朝に呼ばれたこれらの人々は、やがてイバンと呼ばれるようになり[9]、植民地政治下で換金作物の栽培などを通じて経済的成功を収め、さらにマレーシア成立後はサラワク政治で大きな勢力を持つに至ったという（内堀 1987）。

ボルネオ山地の住民は植民地支配の影響を受ける以前には、今日のような部族集団意識は希薄であったと考えられる。彼らは、自分の帰属集団を示さねばならない時には、状況に応じて居住するロングハウス名、ロングハウスが建つ近隣の河川名などを使っていた。この事情は今日でも大きくは変わらない。かつて陸ダヤクと呼ばれ、今日ビダユ（Bidayu）族と称される人々は、都市居住者達が必要に迫られた時を別にすればビダユと自称することはなく、出身ロングハウスが建つ河川名で帰属、出身を表す。同様な例は、カリマンタンのマロー（Maloh）やサバのムルット（Murut）などからも報告され「河川流域集団」と呼ばれたりする（King 1985: 31－35；上杉 1999: 81－84)。こうした、河川流域集団や帰属が曖昧な人々が「部族」として固定化されたことは植民地の行政とその下での社会変化と不可分の関係にあったのである。そして、今日のカリマンタンとサバ、サラワクとの顕著な相違をもたらしたのも、そうした植民地時代から国家成立を経て今日に至る政策と社会変化の結果であった。

このように見てくると、こうした山地民と平地民の対立、ボルネオでのダヤクとムラユの概念的対立は持続的で基本的なものであると考えてよく、その意味では伝統的なものである。この概念的対立は現代の国民国家成立後もボルネオ民族誌を基礎付ける背景として生き続けていると見て良いだろう。山地民の民族誌の側から見るなら、独立国家成立後はマレー人首長やマレー人王国が国家に取って代わられたことになろう。山地民にとって国家とその政策が何かを考える前に、マレー人首長や王国がどのような性格のものだったかを見ておこう。

Ⅳ. 王国と山地民の政体

東南アジアの王国については、ハイネゲルデルンの研究（Heine-Geldern 1956）以来、王宮や首都の配置からその政治構造に至るまで、宇宙論的観念表象をモデルとして構成されていることが指摘されてきている（Geertz 1980; 関本 1987; 富沢 1990など)。タンバイアはこうした政治組織を「銀河的政体（Galactic Polity)」と呼び、これを古代ジャワのマジャパイト、マタラム王朝やマレーシアのヌグリ・センビランなどの王朝の空間配置によって例証し、さらにボロブドゥール遺跡や曼陀羅図の配置とも関連づけている（Tambiah 1976)。これらの王国は、簡潔に言うなら王によって象徴される中心性によって定義され、王国の権力はこの中心が放射する力の強弱によって決まるが、このもっぱら象徴的な力は中心から遠ざかり、周縁に向かうに従い弱まり、やがて消滅する。同時に中心から遠ざかれば遠ざかるほど、社会的地位も低下して行く。王権を大星雲とするなら、その周辺にはこれと相似形をなす大小の小星雲が取り巻き、それらの全体が大きな渦のように大星雲を形成している。大小の渦はその時々に盛衰をくり返し、大きな渦が衰退すると共に、小さな渦が増大して衰退した小さな渦を飲み込む。

ボルネオでは大きな王権の中心はブルネイ王国であり、これと対立するものはフィリピン南部に中心を持つスールー王国であるが、その周縁にはポンティアナク、バンジャルマシンなどボルネオ各地に散らばる大小の交易拠点があり、それらは大小の権力中心として王国を取り巻いていた。さらに、ボルネオを取り巻く周囲には東方にスラウェシの大小諸王国、南にジャワ、バリなどの王国が控え、西方にはスマトラ、マレー半島の諸王国が割拠していた。ボルネオ山地民社会は、こうしたマレー系諸王国の観点からは末端に位置づけられ、その周縁として低い地位にあるものとして見下されていた社会であった。

こうして中心性によって定義される王国、権力からは周縁に位置する大小の交易拠点、大小

の首長はその権力の外延であるが、そうした拡がりは限られた外部境界を持つわけではなく、少なくとも可能性として無限の拡がりを持っている。周縁に位置する山地民社会は、その無限の拡がりの中に包含されるべきものであり、時に起きる山地民との対立、首狩などは権力に対する「反乱」であり、略奪行為、海賊行為でしかない。直接の武力を持たない王国は彼らを懐柔するか、あるいは他の山地民武力に依存して鎮圧するしかないが、王国の観点からは、山地民が権力の周縁に包摂されている事実に変わりはない。ブルネイ王国とスルー王国にとってボルネオ山地民とはそうした存在であったばかりではなく、ジャワの王権を引き継いだオランダ植民地政府も、少なくともボルネオではそのように機能していた。ボルネオばかりでなく、20世紀初頭まで、スマトラでもスラウェシでもオランダ植民地政府（おそらくイギリス植民地政府も）はそうした大小の権力の一つとして現地では認識されていたと推定される。いずれにしても、こうした対立しつつも相互に依存し合う共棲的な関係は、山地民との間だけでなく、海洋民バジャウとの間にも見られたと考えられる（富沢 1997）。

ホールは東南アジア国家の発展とその権力の基盤をなす海洋交易を論じる中で、平地水稲耕作を中心とする交易システムに依存する東南アジア大陸部平地やジャワのようなタイプの王国とシュリビジャヤ王国のように河川交易に依存するタイプの王国に分けた（Hall 1985）。前者を水稲交易型とするなら、後者は河川交易型と呼ぶことが出来るが、ボルネオの大小の王国は明らかに後者のタイプに属する。王国は山地住民を支配しているわけではなく、山地産物を河川交易を通じて集積し、それを海洋交易のネットワークにのせる権益を持つに過ぎない。山地民は周縁の低い地位に貶められているとは言え相対的に自立しており、また王国は彼らとの交易と協力関係無しには存在し得ない。山地民はそうした大小の王国とその末端の権力と時には協調し、時には敵対し、また王国への帰属を変更しながら巧みに共存関係を築いていたと考えられる。

こうした共棲関係の中で、平地民社会が中心性によって定義されるなら、山地民社会は外縁と境界によって定義されると言えるだろう。すでに述べたように、山地民には平地民権力に服した、あるいはその支配下に入ったという認識はない[10]。ボルネオ山地民は多くはロングハウスという名称で民族誌に記述される大規模な棟割りの杭上長屋に集団生活をしている。このロングハウスが村として機能するが、これを超える権力が存在することはまれである。山地民はまずこのロングハウス名によって自己の帰属を表し、次にそのロングハウスの近くを流れる河川名によって近隣集団（すでに述べた「河川流域集団」）への帰属を表現する。ロングハウスと近隣集団は時に応じて首狩戦闘の単位である。従って山地民相互の戦闘、首狩はまれではない。サラワクでブルック王朝の初期に山地民（今日のイバン）の「反乱」を鎮圧した兵力は、同じ山地民（スクラン川のイバン）であり、ブルックによるサラワク「平定」の過程では以前にもましておびただしい数の生首が狩られたという。山地民にとって外部世界とはまず近隣のロングハウスであり、異なる河川流域集団であり、さらに河川の下流と海岸部村落、そして海の世界である。スラウェシの例でも示したように、山地民にとっては下流と海の世界は汚れた世界であるが、ボルネオでも同様である。

サラワクと西カリマンタンの境界地域に国境をまたいで居住するセラコ（Selako）では、内陸山地と海の対立がロングハウスの構造やそこで行われるさまざまな儀礼慣行に表れている。山地民ダヤクは内陸、上流（ダヤ、Daya'）の人々でマレー人（単に海、laut と呼ばれる）とは海岸部の人々である。悪霊を祓う時は海の方へ祓い、死霊は外洋にある島へ行くと考えてい

る。ロングハウスの正面の外へ張り出した長いベランダはパンテ（pante）と言い、奥の裏側の空間はウアトゥン（uatn）と言う。これは、明らかにマレー語の海岸（パンタイ）と森（ウータン）と同語源である。また、空は神聖な空間で、出入りが嫌われる高床下は穢れた不浄な空間であり、タブー空間である（Schneider 1975）。

外部世界は首狩や出稼ぎ、交易を行うところだが、こうした行為は同時に山地民に富をもたらす。首狩についてはすでに多くの議論があり、ここでは首狩そのものについて深入りすることは避けるが、ボルネオでは首狩を行うにはいくつかの理由が伝えられている。それらは、喪明けの儀礼、若者が一人前に結婚をするための条件として、豊作祈願として、疫病などの蔓延を防ぐなどが挙げられる。簡潔にいうなら、農耕、家畜、人などの豊穣性と社会の健全性の獲得、確保のためであり、それを獲得する世界が外部世界である。そして、そうした勲功を顕彰するための儀礼が勲功祭宴として行われる首狩儀礼と葬送儀礼である。首狩が禁止され行われなくなった現在でも、この基本的なイデオロギーは維持されている。サラワクのイバン族ではブジャライ（bejalai）と呼ばれる集団出稼ぎが今日でも行われる。この慣行は元来は首狩遠征であったとも言われるが、今日では男性が外部世界に遠征することによって、さまざまな試練と新たな経験をへて、村に富と豊穣をもたらす勲功遠征と考えられている。男性はこの経験によって、一人前の男性としての権威と名誉を獲得する（Kedit 1993）。今日でも、山地民にとって海の世界、平地社会は富と権威、名誉、豊穣を獲得する世界なのである。

山地民と平地民は、このようにそれぞれの世界の中でそれぞれの秩序と組織を作り上げ、相互にその存在を尊重する中で、政治的にも生態適応の上でも微妙な共棲関係を作り上げてきている。この共棲関係は暗黙の秩序と相互了解の上に築かれ、暗黙の信頼関係に基づくものでもある。秩序と了解が暗黙のものである以上、時に意図的、無意図的にその了解に反する行為が相互に行われる危険性を内在している。そうした場合、山地民は首狩という儀礼的行為でこれに報いてきた。しかしながら、そうした微妙な相互了解と信頼関係に基づく秩序は現代国家体制とは相容れないものでもある。国境と国民によって定義される国民国家の観点からは、山地民は国家に包摂されるべき存在、すなわち国民の一つに過ぎず、その自立的秩序は容認しがたいものである。自治とは混乱、反中心性をを内包し、山地民は反乱者、秩序を乱す反国家的後進民族として服従の対象とされる。現代国家体制は伝統的権力とそれを引き継いだ植民地行政の延長にあるが、山地民の観点に立つなら、植民地政府も現代国家も擬似的にはムスリム王権と変わるところはない。少なくとも山地民側はそう反応し、彼らの文化は共棲関係の侵犯に対してはその文化の規範が求める対応、すなわち首狩の実行を求めることになるだろう。

V．政治過程としての首狩と民族文化

首狩慣行にはさまざまな側面がある。多くの文献が記述するように、首狩は農耕儀礼、人生儀礼、性別役割分業と性差など、地域により文化の脈絡によりさまざまな側面を見せている（Hoskins 1996）。こうした首狩慣行は、今日では山地民の伝統文化のシンボルであり、時には民族のアイデンティティーの、また時には観光のシンボルとして積極的な意義を持っている。首狩慣行とは、首狩の実行よりもむしろそうしたさまざまな文化の脈絡の背後にある文化のイディオムとして機能している。こうした意味では首狩慣行とは何よりもイデオロギーであり観念世界の中で生き続ける文化なのである。首狩が行われなくなって久しいスラウェシ山地民に

とっても、首狩儀礼は首狩が行われていた時代と変わることなく今なお継続されているばかりか、イデオロギーとして現実生活の中で生き続けている（George 1996）。首狩が禁止された以降もその代替儀礼が継続されている地域は他にも多い。首狩はイデオロギーとして儀礼の中に生き続けているだけでなく、対立抗争の政治的解決のイデオロギーとしても現実政治の中で生きているのである。そして、カリマンタン首狩事件は、首狩が儀礼過程であると同時に政治過程でもあり、首狩のイデオロギーと現実の首狩との間の距離が紙一重に過ぎないことを示した。

首狩がボルネオ住民にとって現実のものとして恐れられていることを示す事例はいくつか報告されている。メトカーフは1974年、サラワクのベラワン現地調査の最中に、人々が首狩を恐怖する余りパニック状態に陥っていた状況を報告している。首狩はプニャムン（Penyamun）と言われ、元来は盗賊を意味するマレー語だが、ボルネオでは首狩、あるいは首狩に対する恐怖を意味している。噂は軍服姿の偽兵士の集団が生首を求めて付近のジャングルを徘徊しているというものだが、メトカーフがジャングルで遭遇した一人の若者は恐怖の余り彼に向かって発砲したという。幸い弾は命中しなかったものの、一時調査を中止して山を下りねばならなかった。こうした噂は、すでに植民地時代の初期から記録されており、多くは巨大な土木工事や建築物への人柱として首狩が行われるという噂で、1974年のプニャムンもミリ市沖合に建設された巨大な油井が発端だったようである（Metcalf 1996: 280－287）。

こうした首狩の噂と、山地民の首狩慣行が直接結びつくわけではないが、首狩が決して過去の出来事ではなく現実のものであると人々が考えていることは事実である。メトカーフは噂は、首狩慣行を持たなかった中国人、アラブ人、マレー人などをも含んでサラワク全土、おそらくはボルネオ全島に共通するものであるとし、それはボルネオの人々が自らの能力では抗することが出来ない外部からの巨大な力、植民地政府や国家がもたらす政策、巨大土木工事、開発や「進歩」に対する反応ではないかと言う。こうした意味では、首狩と人柱の噂はメラネシアのカーゴ・カルトとなにがしかの共通性があるとメトカーフは指摘する（Metcalf loc. cit.; Atkinson 1983; Drake 1989）。

人柱の首狩が誰によって行われるかについて記録は一致しないが、今日ではマドゥラ人やブギス人が噂される（Hoskins 1996: 31－35）。いずれもかつて奴隷交易に深くかかわったとされるムスリム平地民であり、ダヤクはそうした侵犯に対して首狩で報いた。今回の首狩事件がマドゥラ人を標的としたのは、一般に解釈されるようにマドゥラ人の民族性に対する反発ではなく、おそらくそうした伝説的な首狩伝承とイデオロギーにもとづくのであろう。植民地時代以降、平地民によって権益や誇りが侵犯され、さらに植民地政府とインドネシア国家によってダヤクの誇りである首狩が禁止され、政府のプロジェクトという抗すべくもない巨大な力によってダヤク文化の尊厳が傷つけられてきたことに対して、ダヤクはやり場のない怒りと悲しみを感じている。インドネシア領カリマンタンへの大量の移民、トランスミグラシ政策と移民であるマドゥラ人によるダヤク領域の侵犯は、伝統的な山地民と平地民との共棲関係にとっては、相互の了解と信頼関係への明白な侵犯であり、かつての奴隷商人マドゥラ人による首狩の噂と共に、禁止された首狩慣行を復活しダヤク文化の尊厳を取り戻すための動機として十分すぎるものであった。国軍末端の不満や小さな暴力事件は首狩開始のきっかけに過ぎない。こうして現実の出来事となった首狩のイデオロギーは、ダヤクにとっては政治過程であると共に儀礼過程であり、この過程は儀礼的に収束せねばならない。5月上旬、カティンガンのダヤクは首狩

の主要舞台となったサンピトの町で、次々と水牛を供犠し祖霊を慰撫することによって事件を終息させて行ったと伝えられる。

事件は多くの報道が描くように、宗教対立やの民族対立という面がないわけではない。東南アジア地域では植民地時代以降、多くの山地民がキリスト教を受け入れた。キリスト教を布教する側の宣教師ミッションが、熱心な仏教徒あるいはイスラム教徒である平地民に対立する山地民にキリスト教布教の大きな可能性を見いだし重点的に布教活動を行ったこともキリスト教の布教が進んだ理由の一つである。マレーシア、インドネシアではボルネオ山地のダヤクをはじめ、スマトラ山地のバタク、スラウェシ山地民（広義の）トラジャなどを挙げることが出来る。しかしこれらの人々は、必ずしも信仰としてキリスト教を受け入れたわけではなく、伝統的な対立概念、山地民と平地民という対立に従ってシンボルとして政治的にキリスト教を受容した一面があるだろう。この意味ではキリスト教は民族の自覚のシンボルとして受け入れられたと見ることができる。

スラウェシのトラジャ族の場合、インドネシア国家成立後に民族意識が形成された時、国民国家の中では民族のアイデンティティーのシンボルとしてキリスト教は機能せず、代わって伝統的な儀礼、葬送儀礼がその役を担わされた。この儀礼はもちろん本来の伝統的なものそのままではなく国家形成の過程で変化し作られたものである（山下 1988: 297－301)。ボルネオのダヤクにとっても状況は同じであったが、平地民に傷つけられ侵害されつつあるダヤクにとっては、平地民に対する伝統的な政治、儀礼過程である首狩慣行が、まさしく平地民インドネシア政府によって禁圧されていたが故に、ダヤクの誇り象徴する格好のものであった。しかしながら、事件を民族対立として解釈するのは一面的に過ぎよう。すでに明らかなようにダヤクという民族集団が存在するわけではない。また、当然山地民という民族が存在するわけでもない。事件は、山地民と平地民という伝統概念の対立の上に、インドネシア政府内部の対立と混乱、植民地化と国家成立という歴史的過程、そして平地民文化と山地民文化という生態的適応にもとづいた二つの文化様式の対立、さらにそれらをを結びつける首狩慣行といったさまざまな要素が相互に絡み合って生み出されたものである。

こうして見てくると首狩慣行が決して過去の蛮行ではなく、現在も生きるイデオロギーであり世界観であり続けていることがわかる。首狩慣行を豊饒儀礼、特に農耕儀礼と見る見解は古く、また今日も繰り返されている主張であり（古野 1942；鳥越 1995)、確かに首狩は農耕、特に稲作儀礼との結びつきを示す民族誌は多い。しかし首狩慣行ははそれだけでなく感情や情熱、民族の名誉や誇り、特に男性のそれとの結びつき、結婚、出産、葬送など通過儀礼とも結びつくなど実に多様な民族誌的事実と関連する。首狩慣行を単純に豊饒儀礼との関連でのみ理解するなら、今回のカリマンタン首狩事件は単なる暴虐事件であり、理解し難い非難すべき過去の蛮行の復活に過ぎない。しかしそのような一面的理解は民族誌を単なる過去の記録へ貶めることになるばかりでなく、事実を著しく曲解し民族誌の現実から目を逸らすことになると思われるのである。

注

（1）カリマンタン（Kalimantan）はボルネオ西部で山地民を表すKlemantan、Kelemantanのどの用語に由来するが、この語の語源などは不明である。

（2）ジャワ島の814人/kmに対して、カリマンタン17人/km、マルク諸島とイリアン7人/km、スマトラ77人/kmなどである（1990年、Biro Pusat Statistik 1993）。また、スマトラ島内でも北スマトラは人口密度が高く、南スマトラは低い。スラウェシも同様で、北スラウェシ、南スラウェシは人口密度が高く、中部スラウェシ、南東スラウェシは低い。

（3）「森の人」を意味するOrang Hutanは、類人猿のオランウータンと概念上の区別はない。場合により類人猿オランウータンを意味し、時には森林住民「ダヤク」を意味する。

（4）Koentjaraningratはインドネシアの「部族」（Suku Bangsa）を180数え、SIL（Summer Institute of Linguistics）のEthnologueはインドネシア全体で726の言語を数えている（Koentjaraningrat 1983, Grimes 2000）。

（5）具体的な人口の移動、トランスミグラシの移動については、綾部恒雄、石井米雄（編）1995、pp. 57－62。トランスミグラシは特にカリマンタンに多く、ついでスマトラ、スラウェシ、イリアン、マルクなどに多い。

（6）サラワクへの出入国は活発である。1998年の入国者数はおよそ327万人である。この内のおよそ290万人は半島部マレーシア（西マレーシア）と隣国のブルネイ、インドネシアからのものであるが、いずれにしてもサラワクの総人口が203万人弱（1999年推計）であることを考えると、外部人口の流入がいかに巨大な地域であるかがわかる（Jabatan Perangkaan Malaysia, Cawangan Sarawak 1999）。外部人口の流入が民族対立をもたらすわけではないことが分かる。

（7）実際、フィリピン、ルソン島山地をはじめ、サラワクのクラビットなど山地深くに精妙な灌漑水田を発達させている例も多く、また、スラウェシ、マレー半島、ボルネオなど水稲耕作技術と焼畑陸稲耕作技術が交錯している所も多い。

（8）To di ulunna salu 上流、源流の人々とも言う（George 1996: 53）。

（9）海ダヤクはやがてイバン族と呼ばれるようになり、サラワクの主要民族である。彼らは今日イバンと自称するが、イバンという名称は元来カヤン語で「森を放浪する不快な人々」を意味する「ヒバン（Hivan）」という侮蔑的な他称に由来すると言う。この名称が一般に受け入れられるようになるのは第二次大戦後で、イバン自身はこの名称よりも河川流域名称で自分の帰属を表すことが多い（Pringle 1970）。

（10）この事情はボルネオや島嶼部東南アジアに限らず、大陸部東南アジアにも共通するものである（Leach 1961）。

引用文献

Atkinson, Jane Monig
1983 "Religions in Dialogue: the Construction of an Indonesian Minority Religion," American Ethnologist Vol.10: 684－696.

Ayabe Tsuneo & Ishii Yoneo（ed）綾部恒雄、石井米雄（編）
1995『もっと知りたいインドネシア（第2版）』
東京：弘文堂

Biro Pusat Statistik
1993 *Statistik Indonesia: Statistical Year Book of Indonesia 1993.*
Jakarta: Biro Pusat Statistik.

Drake, Richard Allen
1989 "Construction Sacrifice and Kidnapping Rumor Panics in Borneo," Oceania Vol.59: 269－279.

Furuno Kiyoto　古野清人
1942『原始文化の探求』
『古野清人著作集』（1992）に再録、東京：南斗書房

Geertz, Clifford

1980 *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali.*
Princeton: Princeton University Press.

George, Kenneth M.
1991 "Headhunting, History, and Exchange in Upland Sulawesi," The Journal of Asian Studies Vol. 50－3: 536－564.
1996 "Lyric, History, and Allegory, or the End of Headhunting Ritual in Upland Sulawesi," in Hoskins (ed), 1996.

Grimes, Barbara F. (ed)
2000 *Ethnologue: Languages of the World: Fourteenth Edition.*
Dallas: International Academic Bookstore.

Heine-Geldern, Robert
1956 *Conception of State and Kingship in Southeast Asia.*
Ithaca: Cornell University Press

Hall, Kenneth R.
1985 *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia.*
Honolulu: University of Hawaii Press.

Helliwell, Christine
1992 "Evolution and Ethnicity: A Note on Rice Cultivation Pracitces in Borneo," in James J. Fox (ed) 1992 *The Heritage of Traditional Agriculture among the Western Austronesians*, Canberra: Department of Anthropology, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.

Hoskins, Janet
1996 "Introduction: Headhunting as Practice and as Trope," in Hoskins, Janet (ed), 1996.

Hoskins, Janet (ed)
1996 *Headhunting and the Social Imagination in Southeast Asia.*
Stanford: Stanford University Press.

Ito Abito, Sekimoto Teruo, & Funabiki Takeo (ed) 伊藤亜人、関本照夫、船曳建夫（編）
1987 『現代の社会人類学３：国家と文明への過程』
東京：東京大学出版会

Jabatan Perangkaan Malaysia (Cawangan Sarawak)
1999 *Buku Tahunan Perangkaan, Sarawak 1999.*
Kuchin: Jabatan Perangkaan Malaysia (Cawangan Sarawak).

Kedit, Peter Mulok
1993 *Iban Bejalai.*
Kuala Lumpur: Published for Sarawak Literary Society by Ampang Press Sdn. Bhd.

King, Victor T.
1985 *The Maloh of West Kalimantan: An Ethnographic Study of Social Inequality and Social Change among an Indonesian Borneo People.*
Dordrecht: Foris Publications.
1994 *World Within: The Ethnic Groups of Borneo.*

Koentjaraningrat
1983 Pengantar Ilmu Antropologi.
Jakarta: Aksara Baru.

Leach, Edmund R.
1954 *Political Systems of Highland Burma.*
Boston: Beacon Press.
（関本照夫訳　1988『高地ビルマの政治体系』東京：弘文堂）

1961 "The Frontiers of 'Burma'," Comparative Studies in Society and History Vol.3, No.1: 49－68.

Le Barr, Frank M. (ed)

1972 *Ethnic Groups of Insular Southeast Asia Vol. 1.*
New Haven: HRAF Press.

Maxwell, Allen R.

1996 "Headtaking and the Consolidation of Political Power in the Early Brunei State," in Hoskins (ed), 1996.

Metcalf, Peter

1996 "Images of Headhunting," in Hoskins (ed), 1996.

Pringle, Robert

1970 *Rajahs and Rebels: the Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841－1941*
London: Macmillan

Sandin, Benedict

1967 *The Sea Dayaks of Borneo: Before White Rajah Rule.*
London, Melbourne, Toronto: MacMillan & Ltd.

Sekimoto Teruo　関本照夫

1987 「東南アジア的王権の構造」
伊藤、関本、船曳（編）、1987　所収

Schneider, William M.

1975 "Aspects of the Architecture, Sociology, and Symbolism of the Selako House," Sarawak Museum Journal Vol.23 (New Series No.44): 207－219.

Tambiah, S. J.

1976 *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background.*
Cambridge: Cambridge University Press.

Tomizawa Hisao　富沢寿勇

1990 「王権観念の原理と諸相」
土屋健治（編）『講座東南アジア学6：東南アジアの思想』所収、東京：弘文堂

1997 「東南アジア海域世界の国家と海洋民」
塩田光喜（編）1997『海洋島嶼国家の原像と変貌』所収、東京：アジア経済研究所

Torigoe Kenzaburo　鳥越憲三郎

1995 『稲作儀礼と首狩』
東京：雄山閣

Uchibori Motomitsu　内堀基光

1987 「国家と部族社会：サラワク・イバンの経験」
伊藤、関本、船曳（編）、1987　所収

Uesugi Tomiyuki　上杉富之

1999 『贈与交換の民族誌：ボルネオ・ムルット社会の親族と祭宴関係のネットワーク』
吹田：国立民族学博物館

Yamashita Shinji　山下晋司

1988 『儀礼の政治学：インドネシア・トラジャの動態的民族誌』
東京：弘文堂